

溝

本調査地点において確認した溝状の遺構は計9条を数えるが、今回の報告書に掲載したのは北側の5条の溝についてのみである。他の溝状遺構についての報告は再度機会を設けて行うことにしたい。

5条の溝状遺構のうち溝5を除く4条の溝は古墳時代前期中葉から中期にかけて掘られた溝で、いずれも段丘斜面にかかる調査区西端を南から北へ流れていたものである。これらの溝は弥生中～後期土器包含層である黒褐色粘質土から掘り込まれたものであり、包含層からは中期後半の土器群とともに1号甕棺墓下甕片や、3号土壙出土壺4の口縁、その他、墓群に伴う祭祀土壌に廃棄されていたものと推される短頸壺等の出土を確認しており、弥生中期土器片も大きめの破片が多くかつ著しい摩耗を受けた痕跡がみられないこと、また古墳時代中期の住居跡の床面レベルが、前期の住居跡のものと比較すると前者のほうがかなり深くまで掘削されていること、黒褐色土のなかに少量ではあるが布留式の鼓形器台、甕、壺片等の出土がみられること等から、古墳時代の前期中葉から中期、とりわけ前期後葉に当地において大規模な地下げ、土地造成が行われたことが想定される。

以下、個々の遺構について詳説する。

溝 1 (第80図)

段丘斜面に沿って掘られた3条の溝のなかで最も東側に掘り込まれた溝である。南側は削平を受け途中で消失している。流水方向は北向きであり流路は9号住居横で小さくS字状に蛇行し、溝2を切って調査区外へ続いているが、北端で5号住居跡に切られている。

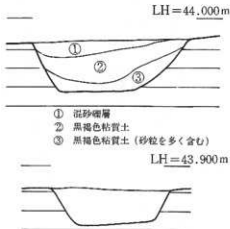
溝幅は125cm、深さ42cm程で断面逆台形状を呈しており、埋土は礫と砂層が互層をなしている上層と、黒褐色粘質土の下層からなり、上層から多量の土器器が出土している。

出土土器 (図版44, 第81～83図)

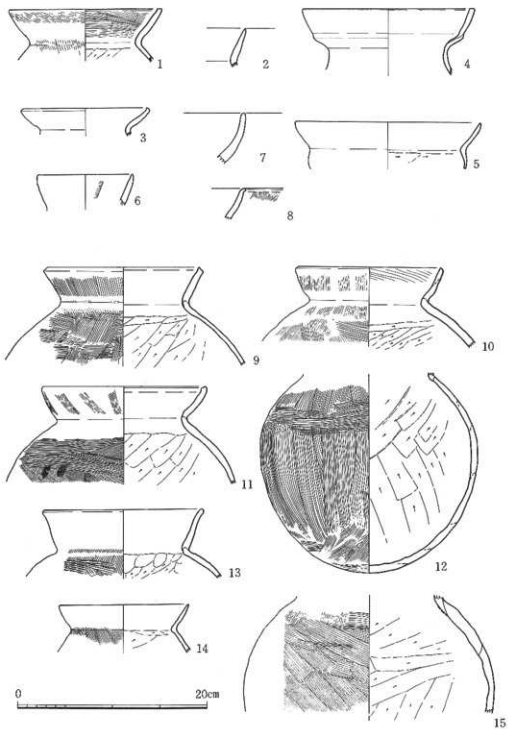
1～8は下層黒褐色土、9～40は上層の砂礫層から出土した土器である。

1～3、8は甕口縁片で、1、3は口唇部が平端につくられ、内側にむけて小さくつまみ出されているが8は逆に口唇部が外向きに折り曲げられており、2は尖りぎみながら丸くおさめられている。4は山陰系複合口縁壺口頸部で、口縁立ち上りの屈曲はだれているが、口唇部は平端面をなし内側へ若干肥厚する。

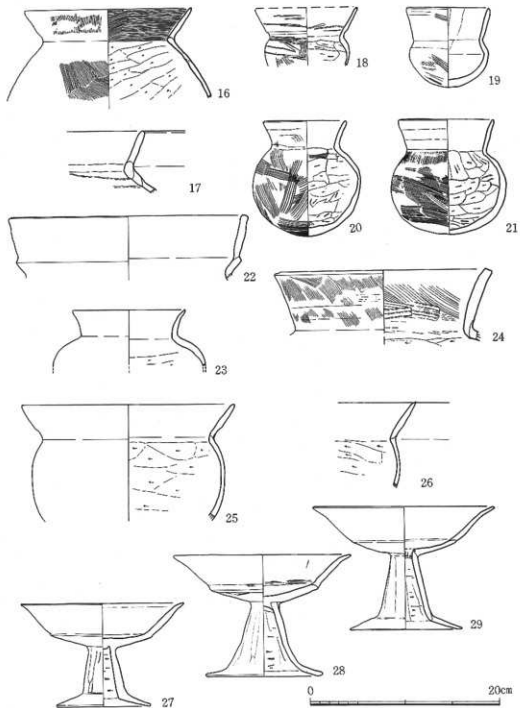
7～17は甕である。胴部は12にみられるように



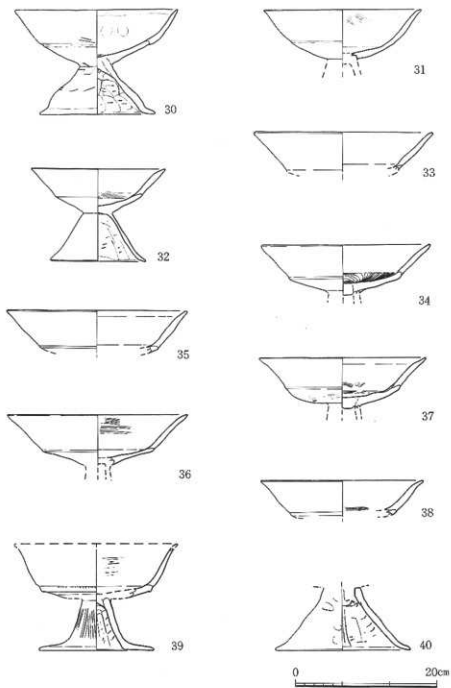
第 80 図 溝 1・2 断面図 (1/30)



第 81 图 溇 1 出土土器实测图① (1/4)



第 82 图 清 1 出土土器实例图② (1/4)



第 83 图 溱 1 出土土器实例图③ (1/4)

ほぼ球形を呈しており、口頸部はやや内弯ぎみに外傾し口唇部は平端面をなすもの、(10, 11) や、ほぼ直線的に外傾するもの(9, 13)など、形態に多様性がみられる。外面の調整はタテハケで胴部を仕上げ肩部にのみ断続的ヨコハケを施し、内面はケズリを施しているものが主流を占めている。口頸部はヨコナデで内外面を整えているが調整が粗いために部分的にハケの痕跡を残している。

27~40は高杯で、出土土器中で最も高い出土比率を示す器種である。杯部は口縁部の立ちあがりの形態によって大きく4類に分けられ、口縁が内弯ぎみにゆるやかに外傾して口唇部にい

番号	器種	部分	色調	胎土	焼成	備考
1	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	ふつう	
2	甕	口縁部	淡赤褐色	砂粒をやや含む	ややわるい	
3	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	やや悪い	
4	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	ふつう	
5	壺	口縁部	伊淡赤褐色 伊淡黄褐色	砂粒をかなり含む	やや悪い	
6	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をやや含む	ふつう	
7	桶	口縁部	淡黄褐色	砂粒をやや含む	良好	
8	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒の含有はごく少量	良好	
9	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	良好	
10	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	良好	
11	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む(器2-3mmの粒含む)	ふつう	
12	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒を多く含む(5-8mmの大きな粒含む)	やや悪い	外面に煤付着
13	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む(器2-3mmの粒含む)	ふつう	
14	甕	口縁部	淡赤褐色 (丹塗付)	砂粒をわずかに含む	ふつう	
15	甕	胴部	淡黄褐色 (やや赤み)	砂粒をかなり含む	ふつう	
16	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	ふつう	
17	甕	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	ふつう	外面に煤付着
18	壺	口縁部	淡茶褐色	白色小砂粒を含む良質の粘土	良好(硬質)	外面に煤付着、内外面に黒斑
19	壺	完形	明茶褐色	白色砂粒を多く含む、やや粗めの粘土	良好	口縁部に黒斑
20	壺	完形	淡茶褐色	小砂粒を含む良質の粘土	良好	胴部に黒斑
21	壺	完形	淡茶褐色	白色砂粒を多く含む、小砂粒が混じる	良好	胴部に黒斑
22	壺	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	良好	
23	壺	口縁部	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	ふつう	内外面とも表面の磨減が激しく(調整は不明)
24	壺	口縁部	淡黄褐色	砂粒をかなり含む	良好	口縁部の一部に黒斑
25	壺	口縁部	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	ふつう	
26	壺	口縁部	淡黄褐色	砂粒をわずかに含む	ふつう	
27	高杯	完形	淡桃褐色	角閃石、長石粒を多く含む粘土	良好(軟質)	
28	高杯	完形	暗赤褐色	雲母片を含む良質の粘土	良好	
29	高杯	完形	明赤褐色	雲母片を含む良質の粘土	良好	
30	高杯	完形	暗赤褐色	雲母片を含む粘土	良好	
31	高杯	完形	淡赤褐色	細い砂粒を含む良質の粘土(やや悪い)	良好	
32	高杯	完形	淡赤褐色	角閃石、長石粒を含む粘土	良好(軟質)	
33	高杯	完形	淡茶褐色	長石、角閃石、雲母細片を含む	良好(硬質)	
34	高杯	完形	暗赤褐色	大粒の長石粒、角閃石粒を含む	良好	
35	高杯	完形	暗赤褐色 (内面2風乾付)	長石粒を含む良質の粘土	良好(硬質)	
36	高杯	完形	赤褐色	白色小砂粒を含む精緻な粘土を使用	良好	
37	高杯	完形	暗赤褐色	長石、角閃石粒を多く含む	良好(軟質)	
38	高杯	完形	赤褐色	白色小砂粒を含む良質の粘土	良好(軟質)	
39	高杯	完形	淡赤褐色	白色小砂粒を含む細い粘土を含む	良好(軟質)	
40	高杯	完形	淡赤褐色	長石、雲母片等を含む	良好	

第2表 溝1出土土器観察表

たるもの (30, 31等), 口唇部下で逆に外反するもの (27, 28, 29等), 口縁立ちあがりから已にゆるやかに外反しているもの (34, 36, 37等), 立ちあがりの屈曲が著しいもの (39等) があり, 脚部は29に代表される脚柱部と裾部に明瞭な段を有するものと, 30のように脚裾までなだらかに傾斜するものが主流を占め, これらが組み合わされて多様な形態を示している。杯部はハケ調整の後にヨコナデで仕上げるが, 一部ハケの痕跡を残している。

溝 2 (第80図)

溝1, 溝3に切られる溝で断面逆台形状を呈している。埋土は黒褐色粘質土のみで出土土器も少なく弥生土器片のみである。

溝 3 (第84図)

溝2, 15号土壌等を切り, 調査区の西端に掘られた溝である。北端で, 幅□m, 深さ□mを計り, 断面はUあるいはV字状を呈す。調査区における溝流路の傾斜度からみてかなりの急流であったことが推定される。

溝埋土下層からは朝鮮系軟質土器が, 土層からは古式須恵器が, 土師器にともなって出土しており, それとともに多量の弥生土器片が出土している。

弥生土器 (第85, 86図)

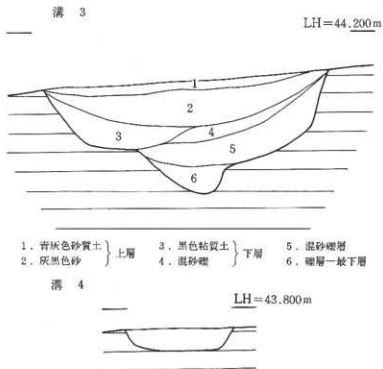
出土した土器の大半は中期後葉のものであるが, 一部後期前半～後葉のもの (6, 7, 8, 28, 29, 30) も含まれる。

1～11は中形甕でいずれも丹塗り研磨等は施されていない。

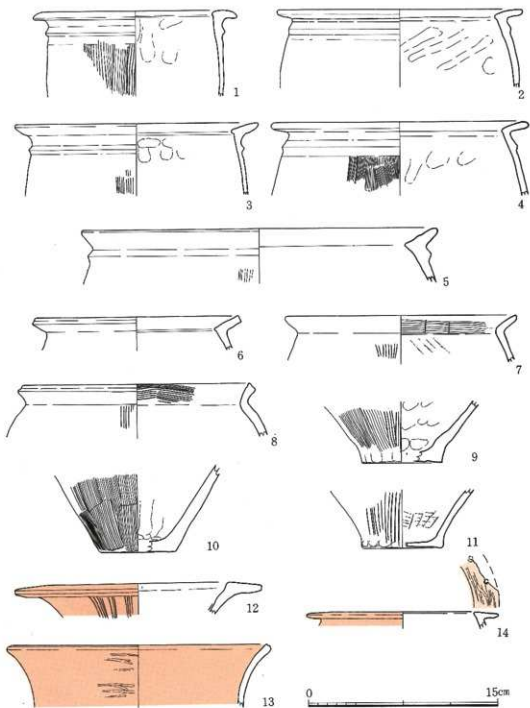
12, 13, 15, 21, 23は広口壺, 14は短頸壺 16～20, 22, 23は袋状口縁壺で, 17, 18のような小形精製品と20のような半精製品がみられる。

土師器 (第87, 88図)

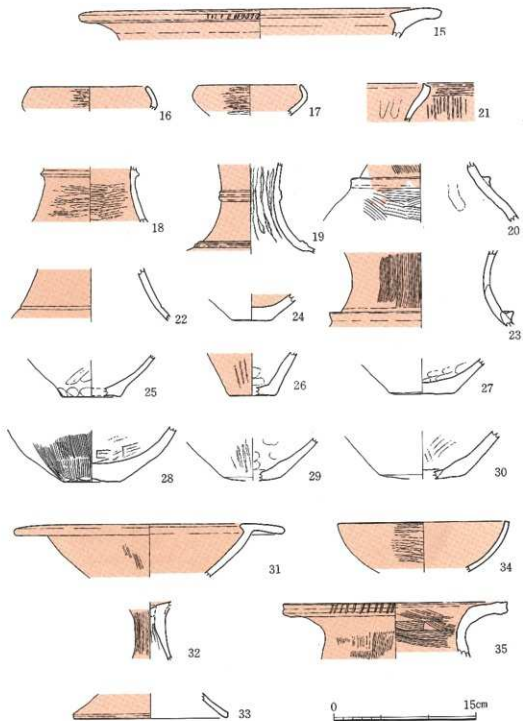
出土した土師器の中



第 84 図 溝3・4断面図 (1/30)



第 85 图 溝 3 出土弥生土器实例图① (1/4)

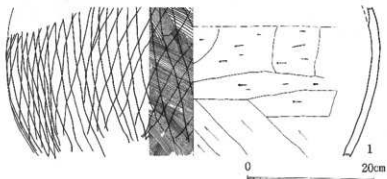


第 86 图 清 3 出土弥生土器实测图② (1/4)

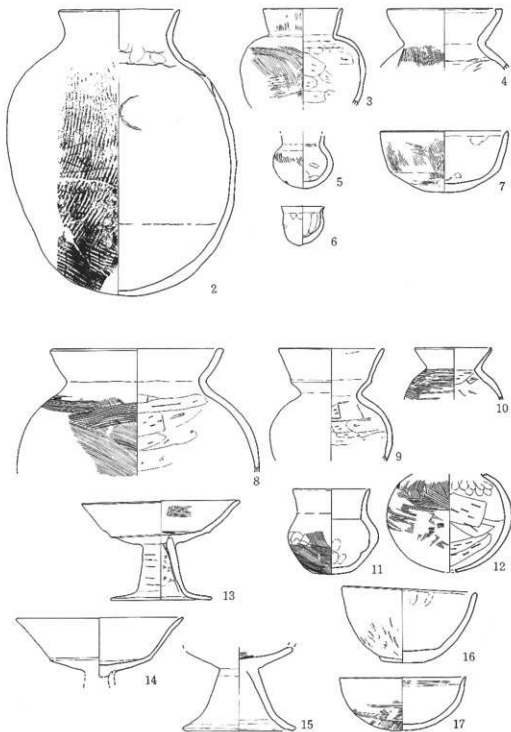
番号	器種	部分	色色調	胎土	焼成	備考
1	甕	口縁部	暗茶褐色	雲母小粒、長石粒を含む	良好	
2	甕	口縁部	明淡橙褐色	小花崗岩粒を含む良質粘土	良好	
3	甕	口縁部	淡茶褐色	大粒の角閃石、長石粒を含む	良好	
4	甕	口縁部	濃茶褐色	角閃石粒を含む	良好	口縁部外面に底が付着している
5	甕	口縁部	明茶褐色	雲母片、花崗岩粒を含む良質粘土	堅質	
6	甕	口縁部	濃茶褐色	長石粒を含む良質粘土	良好(硬質)	
7	甕	口縁部	濃茶褐色	角閃石粒、長石粒を含む	やや軟質	
8	甕	口縁部	暗橙褐色	角閃石粒、長石粒を含む	良好	
9	甕	口縁部	淡橙褐色	小角閃石粒を含む	良好	外面丹塗り
10	甕	底	淡赤褐色 (外底はあみとおひ)	長石粒を含む良質粘土	良好(硬質)	内外面丹塗り
11	甕	底	淡赤褐色 (やや白み)	角閃石粒、長石粒を含む	やや軟質	
12	甕	口縁部	暗橙褐色	角閃石粒、長石粒を含む	良好	外面丹塗り
13	甕	口縁部	淡橙褐色	小角閃石粒を含む	良好	内外面丹塗り
14	甕	口縁部	淡赤褐色 (断面茶褐色)	大粒の長石粒を含む	堅質	口縁部の上部に孔がある、外面丹塗り
15	甕	口縁部	淡明赤褐色	花崗岩粒を多く含む	良好	内外面丹塗り
16	甕	口縁部	淡明赤褐色	花崗岩粒を多く含む	良好	内外面丹塗り
17	甕	口縁部	淡明赤褐色	花崗岩粒を多く含む	良好	内外面丹塗り
18	甕	頸部	暗褐色	角閃石、雲母粒を多く含む	良好	外面丹塗り
19	甕	頸部	暗褐色	角閃石、雲母粒を多く含む	良好	外面丹塗り
20	甕	頸部	淡明赤褐色 (肌色に近い)	長石粒を多く含む粗い粒土	良好	外面丹塗り
21	甕	口縁部	明橙褐色	角閃石粒を含む	良好	内外面丹塗り
22	甕	頸部	外面:淡明赤褐色 内面:黒褐色	大粒の白色砂粒を含む良質の粒土	良好 やや軟質	外面丹塗り
23	甕	頸部	明茶褐色	角閃石、大粒の長石粒を含む	良好	外面丹塗り
24	甕	底	暗橙褐色	角閃石	良好	内外面丹塗り
25	甕	底	暗橙褐色	角閃石粒を多く含む	良好	外面丹塗り
26	甕	底	明赤褐色	小砂粒を含む良質粘土	良好	外面丹塗り
27	甕	底	淡赤褐色	大粒の花崗岩粒を多量に含む粗い粒土	良好	外面丹塗り
28	甕	底	淡黄褐色	角閃石、長石粒を含む	良好	底面に黒斑一部に黒変
29	甕	底	灰褐色	角閃石、長石粒を含む	良好	
30	高坏	高坏部	内面:暗茶褐色 外面:黄褐色	角閃石、長石小粒を含む良質の粒土	軟質	外面丹塗り
31	高坏	高坏部	淡茶褐色	雲母、角閃石粒、長石粒を含む	良好	外面丹塗り
32	高坏	高坏部	淡茶褐色	雲母、角閃石粒、長石粒を含む	良好	外面丹塗り
33	甕	口縁部	淡茶褐色	花崗岩粒を含む	良好	内外面丹塗り
34	甕	口縁部	淡白褐色	長石粒を多く含む	良好	内外面丹塗り

第 3 表 溝 3 出土土器観察法

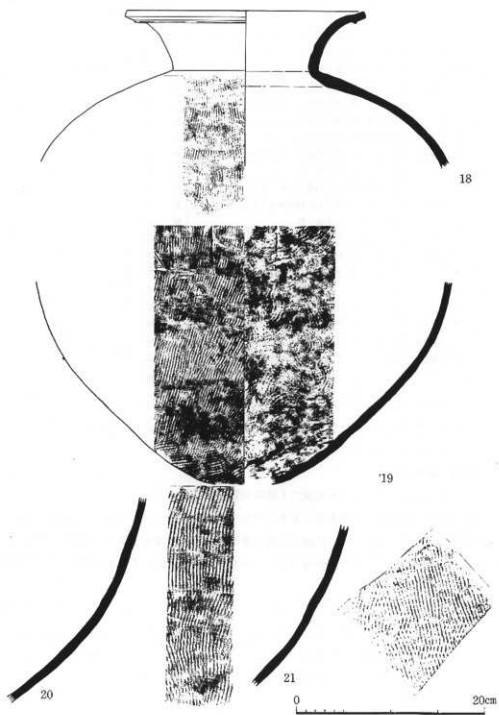
では 1, 2 が注目される。1 は大形甕の胴中位の一部であるが、復元した胴部の最大径は 59cm を計り、胴外面にハケ調整を施した後に斜格子状に沈線をめぐらせている。2 は不整形の長胴形の甕である復元口縁径 12.6cm, 器高 30.3cm, 胴部最大径は胴中位で 24cm を計る。口唇部は尖りぎみに丸くおさまられている。胴肩部に 2ヶ所穿孔が行われており、1ヶ所は穿孔



第 87 図 溝 3 出土土器実測図 (1/6)



第 88 图 清 3 出土土器尖测图② (1/6)



第 89 图 清 3 出土须惠器尖测图 (1/4)

番号	器種	部位	色調	胎土	焼成	備考	
1	壺	胴部			良好	黒斑あり	
2	壺		淡明茶褐色	雲母片、白色砂粒を多く含む	良好		
3	壺	上半部	明赤褐色	大粒の白色砂粒を含む	堅緻	下層硬層	
4	壺	上部	明黄褐色	白色砂粒を少量含む	良好		
5	壺	胴部	淡赤褐色	白色砂粒を少量含む	堅緻		
6	鉢		暗茶褐色	白色小砂粒を多く含む	良好		
7	椀		明黄褐色	白色砂粒を多く含む	良好		
8	甕	上半部	暗茶褐色	白色砂粒を含む	良好		
9	壺	上半部	赤褐色	雲母片、白色小砂粒を含む	良好		
10	壺	上半部	赤褐色	良好	堅緻	上層細砂層	
11	壺		茶褐色	白色小砂粒を含む	良好		
12	壺	胴部	淡茶褐色	白色砂粒を多く含む	良好		
13	高環		淡桃褐色	良好	軟質		
14	高環	環部	淡黄褐色	良好	軟質		
15	高環	脚部	淡暗褐色	良好	堅緻		
16	椀		明茶褐色	花崗岩粒を含む	良好		
17	椀				良好		
18	甕	上部	青灰色	精良	堅緻		須恵器
19	甕	下半部	青灰色		堅緻		
20	甕	胴下部	青灰色		堅緻		
21	甕	胴下部	青灰色	白色小砂粒を含む	堅緻		

第4表 溝3出土土器観察表

の途中で貫通せずにはめている。口頸部は丁寧なヨコナデが行なわれており、胴外面上半には雷むゆる鳥足状のタキが行なわれており、下半には平行タキがみられる。朝鮮系軟質土器の範疇に含まれるものであろう。

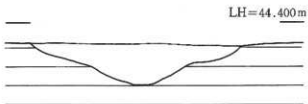
須恵器(第89回)

図示した須恵器はいずれも大形甕で上層細砂層からの出土である。

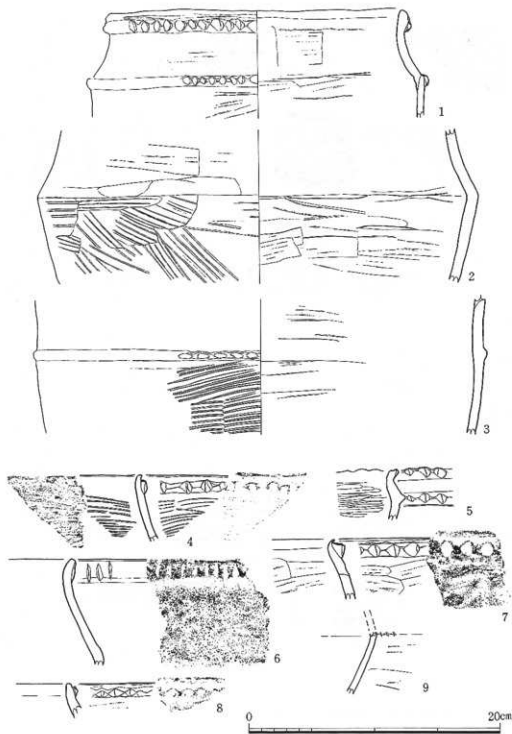
18は口頸部が胴部から屈曲すると大きく外反しては口唇部に向っており、口唇部は断面コの字状をなしており、その下方には鈍い三角突帯がめぐる。19は胴下半で、外面はタテ平行タキの後に9条の平行スリ消し帯がみられる。19を除くと内面はいずれも丁寧なナデ調整が行われている。

溝4(第84回)

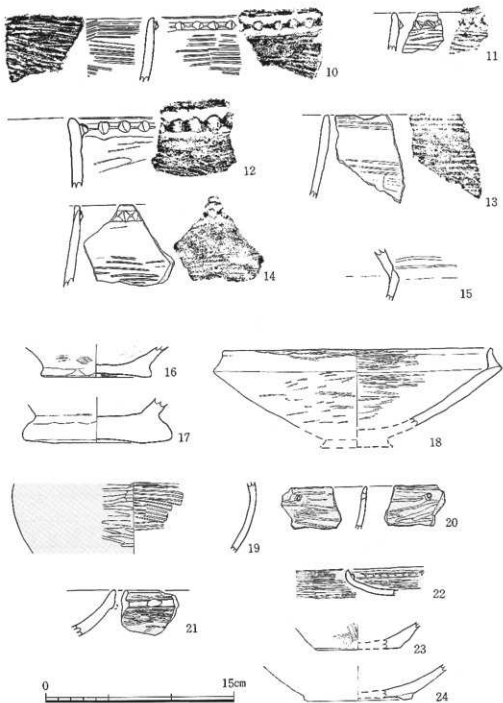
溝3から分流する小溝で幅0.9mを有している。溝3から派生した後は大きく北に向けて蛇行して調査区外にいたる。埋土中から土師器片が出土した。



第90図 溝5断面図(1/30)



第 91 图 沟 5 出土土器夹测区① (1/3)



第 92 图 清 5 出土土器实测图② (1/3)

溝 5 (第90図)

調査区を南西から北西に向けて貫流する溝で幅4.5m、深さ0.4mを計る。断面は扁平な逆三角形形状を呈しており、埋土は混砂礫層であり、埋土中から縄文晩期土器片、黒曜石剥片石器等が出土した。

出土土器 (図版46~48, 第91, 92図)

甕、浅鉢、壺、碗等が出土している。

甕は肩部でくの字状に屈曲するもの(1, 2, 4~9, 15)と、直立するもの(3, 10~14)に分けられる。13を除くといずれも口縁下あるいは屈曲部に指押しによる刻目突帯をめぐらせており、外面の調整は横方向の条痕、擦過が、内面には横方向の擦過、ナデが施されている。

18は外面を擦過した後軽く研磨、内面には研磨が施された浅鉢である。口縁部は屈曲、内傾した後口唇部で直立、若干外反する。19は外面を丹塗研磨しており、内面は横方向の条痕がみられる。20は内外面とも丹塗研磨がみられ口縁部下に小孔が穿れている。21は外面に丹塗研磨が施されており、口縁部下に一条の突帯がめぐる。22は内外面とも丁寧な研磨が施されており、外面と、内面口縁部下に丹が厚手に付着している。無頭壺であろうか。

番号	器種	部分	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	甕	口 縁 部	19 淡 桃 褐色 19 淡 黒 褐色	雲母細片を含む		
2	甕	片 部	暗 茶 褐色	雲母、角閃石等を多く含む	良 好	
3	甕	片 部	明 茶 黄 色	雲母、角閃石粒を多く含む	良 好	
4	甕	口 縁 部	暗 褐 色	白色砂粒を含む	良 好	
5	甕	口 縁 部	暗 褐 色	白色砂粒を含む		
6	甕	口 縁 部	暗 黄 褐色	白色小砂粒を含む		
7	甕	口 縁 部	暗 赤 褐色	金雲母、白色砂粒を多く含む	良 好	
8	甕	口 縁 部	黒 褐 色	白色砂粒を多く含む、粗い	良 好	
9	甕	片 部	暗 茶 褐色	白色砂粒を含む	軟 質	
10	甕	口 縁 部	黒 褐 色	雲母、白色透明砂粒を多く含む	良好(軟質)	
11	甕	口 縁 部	暗 赤 褐色	雲母細片を含む良質の粘土	良 好	
12	甕	口 縁 部	暗 褐 色	白色細粒を多く含む		
13	甕	口 縁 部	暗 茶 褐色	大粒の白色透明砂粒を多く含む	良 好	
14	甕	口 縁 部	明 黄 褐色	雲母細片、白色砂粒を多く含む	良 好	
15	甕	片 部	淡 茶 褐色	雲母、黒色砂粒、白色砂粒を多く含む	良 好	
16	甕	底 部	暗 黄 褐色	白色砂粒を多く含む	良 好	
17	甕	底 部	暗 桃 褐色	雲母片を含む		
18	浅鉢	底 部 欠	19 暗 灰 黒 色 19 暗 茶 褐色	雲母、白色小砂粒を含む	良 好	
19	壺	胴 部	明 茶 褐色	雲母片を含む		丹塗り研磨
20	碗	口 縁 部	淡 黄 褐色	雲母小片を含む	良 好	丹塗り研磨
21	碗	口 縁 部	明 褐 色	白色砂粒を含む		丹塗り研磨
22	壺	口 縁 部	黒 褐 色	雲母小片を含む	良 好	丹塗り研磨
23	壺	底 部	暗 茶 褐色	雲母、角閃石等を多く含む		
24	壺	底 部	19 明 褐色 19 暗 茶 褐色	白色砂粒を多く含む	良 好	

第 5 表 溝5出土土器観察表

(5) その他の出土遺物

出土土器・土製品 (第93図)

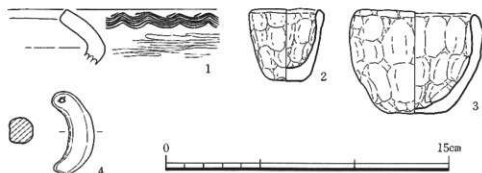
1は1号住居跡埋土から出土した弥生後期初頭の袋状口縁壺片である。細片であるため正確な径の復元は難しいが口縁径は概測で22cmを計る大形の壺となる。口唇部は断面コの字状を呈しており、外面は丹塗り研磨がみられ口縁上方には描線波状文を施している。長石粒の多い胎土を用いており、色は明茶褐色で焼成は良い。2、3は8号住居跡カマド内から出土した手握ね土器である。いずれも雲母片を多く含む精選された粘土を用いた茶褐色の土器で焼成も良好である。4は21号住居跡のPit1から出土した土製勾玉である。

出土石器・鉄器 (図版37, 第94図)

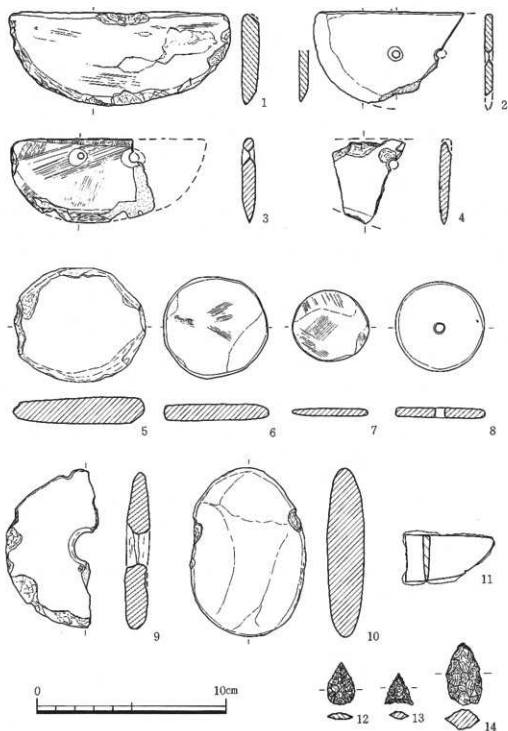
1～4は石庖丁で、1は未製品である。石材は流紋岩で刃部を細割調整した後に研ぎ出す中途のもので、全体に擦痕が残っている。2は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で表面の風化が著しい。刃部は片面からのみの研ぎ出しである。3は粘板岩質頁岩製で器表に粗い擦痕を残している。1はPit208から、2は10号土壌、3は溝3、4は包含層からの出土である。

5～8は石製紡錘車で8を除いていずれも未製品である。1は片磨岩質で重量は110g、側縁の粗割の途中である。6は粗割成形の終了後に表裏・側縁を擦過して整形している。石材は片磨岩で重量は61.5gを計る。7も擦過整形段階のものであるが小品でかつ縁辺部に向けて薄く研磨している。重量は10.5gを計り、石材は流紋岩である。8は完成品で石材は安山岩、重量は23.5gを計る。5は8号住居跡埋土、6は2号土壌埋土、7は13号住居跡、8は調査区の耕作土からの出土である。

9は8号住居跡埋土から出土した環状石斧の欠損品、10の石錘は13号住居跡の埋土からの出土、11は8号住居跡の床面から出土した鉄刀子片である。その他Pitから碧玉製管玉、ミニチュア器台片、手握ね土器片等が出土している。



第 93 図 井原上学遺跡出土土製品実測図 (1/2)



第 94 图 井原上学遺跡出土石器・鉄器石器実測图 (1/2)

Ⅲ おわりに

今回の発掘調査は試掘調査時に出土した遺物から想定した遺構の時代と大きく異なり、古墳時代前期～中期の住居跡群を中心とした遺構配置を示していた。弥生時代の住居遺構は大半が柱穴のみであり、上部構造は削平を受けているため明らかでないが柱穴の数、後世遺構埋土に含まれる土器量の豊富さから、かなりの住居跡が存在していたことが想定される。古墳時代の住居跡群は調査区よりさらに北東に伸びており、昭和58年度に調査を実施した三雲上党遺跡^(注1)に続くもので、ここにひとつの小集落の存在を想することができる。三雲上党遺跡の詳細については現在資料の整理中であり、まとまり次第公表することにした。

墳墓群については、先述のように調査区内では大きく三つのグループに分けることが可能で、かつB群としたグループは方形の墓域区画を有していた可能性をもつ墓群の配置となっており、またその墓域のなかにも2列埋葬を基本とした石棺墓、木棺・石蓋土壇墓の小グループ分けがすることができる。

祭祀土壇は計5基かいずれも箱式石棺墓に伴う配置を示しており、石棺墓被葬者が他の木棺、石蓋土壇墓等の被葬者よりも優位な立場であったことを窺わせる。2、4号土壇には鉄鎌と一緒に廃棄されており、葬送儀礼のなかに弓矢を使用するものが含まれていたことを示唆している。7号土壇には朱がかたまつて出土しているが、この朱が祭祀行為として使用されたものなのか、あるいは石棺内側に塗布することを目的に使用された残物であったのか、今後の分析結果、類例の増加を待ちたい。

溝5からは橋口福年による曲り田(新)式の土器^(注2)が出土している。溝埋土は砂礫土で、溝底がかなりの侵食を受けていることから、この溝は用水路として人口的に掘削されたものである。将来当該時期の集落遺構が三雲遺跡群中から発見されるものと思われる。

与えられた調査整理時間が制約されたものであり、また筆者の浅学、整理能力不足の為十分な報告をなすことができなかったことは自らをして憂慮するに助えない。今後の精進を約束して結びとしたい。

なお末後ではあるが、福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏に石棺墓、祭祀土壇出土の赤色顔料について分析・報告の御足労をおかけした。ここに記して感謝の意を表します。

注1 村田文秀編「三雲遺跡群」I 前原町教育委員会 1978

注2 橋口達也編「石崎曲り田遺跡」III 福岡県教育委員会 1985

付 論

井原上学遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本 田 光 子

井原上学跡1, 5, 6, 8, 9, 号石棺墓, 7, 9号祭祀土壇出土の赤色顔料について, 光顕微鏡による観察と蛍光X線分析により, 赤色顔料の種類を明らかにし, その使われ方について若干の考察を試みた。

赤色顔料の種類

試料はすでに調査時点で採取されていたものであるが, 土砂と混じりあった状態であり, 肉眼ではほとんどが同じようにベンガラ色であった。中で7号祭祀土壇のものは朱が含まれるように見受けられた。

試料の採取地点と分析結果を表1に示す。

光学顕微鏡により
反射光・透過光40～
400倍で検鏡したと
ころ全試料にベンガ
ラ粒子が含まれてい
た。またNo. 1, 2,
6, 7には朱粒子も
見出された。ただし
No. 7の朱粒子は極め
て少ない。

No.	遺構・採取地点	蛍光X線分析	光学顕微鏡	赤色顔料の種類
1	1号石棺墓棺内・側石	Hg, Fe	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
2	5号石棺墓棺床・側石	Hg, Fe, As	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
3	6号石棺墓墓底西隅	Fe	ベンガラ	ベンガラ
4	8号石棺墓棺床・側石	Fe	ベンガラ	ベンガラ
5	9号石棺墓墓底内	Fe, As	ベンガラ	ベンガラ
6	7号祭祀土壇埋土	Hg, Fe	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
7	9号祭祀土壇埋土	Fe	ベンガラ	ベンガラ

表1 赤色顔料の採取地点と分析結果

比較的赤色の濃い部分(土砂も含む)について蛍光X線分析を行なったところ, 表1のようにNo. 1, 2, 6にはHgが検出されたが, 他の試料からは赤色の由来となる元素としてFeのみが検出された。なお, No. 2, 5からはAsも検出されているが, これはベンガラに伴うものかもしれない。将来, 赤色顔料の産地を考えていくうえで, ひとつの大きな要素になるといえよう。

以上の結果により, 1, 5号石棺墓ではベンガラと朱が用いられており, 6, 8, 9号石棺墓ではベンガラのみが使われていたと考えられる。また, 7号祭祀土壇ではベンガラと朱の両者が使われていた。9号祭祀土壇では蛍光X線分析の結果, Hgが測定されないこと, 検鏡結果においても朱は極めて微量であったことから, 今回の結果からだけでは朱の存在は不明といわざるをえない。

赤色顔料の使われ方

1, 5号石棺墓では棺内面が赤く塗られ、床面にも塗られていたようであるが、朱・ベンガラ両者が出土している。この二種の顔料はどのように使われていたのだろうか。棺内面全体は床面も含みベンガラで塗られ、床の一部に朱が使われたのか、あるいは棺内の床面には朱が、それ以外は全面ベンガラ塗りであったのか、それともベンガラと朱を混ぜて使ったのか。すでに採取されてあった試料には「棺内」「甕石」が一括されているため、以上のどの場合であったのか判断できない。しかし、両石棺墓とも古墳時代前期初頭～前半と考えられており、含まれている朱の粒子径からも弥生時代終末～古墳時代初頭の顔料である可能性が強いので、おそらくこの時期に多くみられる「棺内全面(床面も含む)をベンガラで塗り、遺骸の一部に朱を施す」状況だったのではないだろうか。

6, 8, 9号石棺墓で使われた赤色顔料はベンガラであるが、各々使われ方、およびベンガラの質が多少異なる。6号石棺墓では墓壇の西隅にベンガラが認められ、これは産地あるいは時期を知る指標となる可能性の強いパイプ状粒子を含む。8号石棺墓は1, 5号石棺墓同様、床面も含み全面がベンガラで塗られている。ただし、1, 5号のような朱は使われていなかったようである。9号石棺墓では墓壇内にベンガラが認められ、このベンガラにはAsが伴うようである。Asは5号石棺墓の赤色顔料にも検出されており、ここでは朱・ベンガラのどちらに伴うものか判断はできないが、9号例からみて、5号の場合もベンガラに伴う可能性が強い。

7, 9号祭祀土壌での出土状況を実見していないので、はっきりした事は言えないが、7号祭祀土壌出土朱、ベンガラが土器に付着していたものでないことは確かである。なんらかの木製品等有機物に塗布されていたものが腐朽により顔料部分のみ残ったとも考えられる。また、単に朱・ベンガラ(9号土壌ではベンガラのみ)を散布することが祭祀儀礼であったのかもしれない。

井原上学遺跡出土の赤色顔料についての今回の分析結果は、赤色顔料の使われ方、その入手経路について大きな情報を与えるものである。一括にサンプリングされているため、どのような使い方がなされていたのか判断できず残念であるが、朱・ベンガラ二種の顔料が用いられていたことは確かであり、祭祀土壌での使用例は初めてである。またパイプ状ベンガラ粒子、あるいはAsの存在という、ベンガラに関する貴重な情報もある。

今後、同種の遺構での赤色顔料出土状況の詳細、それと同時に有効なサンプリングが行われることにより、墳墓、祭祀遺構での赤色顔料の使われ方に関する資料が蓄積されることを期待したい。

注1 ベンガラには幾通りかの製法があり、その製法の違いにより粒子の形状や粒度に大きな違いがみられる。また最近では出土ベンガラに含まれるパイプ状粒子が産地を示すものではないかと注目されている。(永嶋1985, 戸高1986)

- 註2 宮内庁正倉院事務所成頼正和氏に測定を依頼しました。記して感謝の意を表します。
 蛍光X線分析測定条件・装置;理学電機工学XX線蛍光X線装置(大型試料台付)、
 X線管球;クロム対陰極、分析結晶;フッ化リチウム、検出器;シンチレーションカウンター、
 印加電圧一電流;40KV-20mA、走査速度・特定数等適宜設定。
- 註3 大和麻の朱にはAsを伴うという報告があるが、(矢島他1975)今回の結果を単純に比較することはできない。重要な点なので、今後とも分析を続けたい。
- 註4 ベンガラと朱が混じりあった状態であり、しかも朱粒子数が少ないので、粒子径分布の測定は行っていない。しかし、弥生後期後半以後の朱に顕著に認められる15 μ m以上の粒子が多く含まれている。

文 献

- | | |
|--------------------|--|
| 市 毛 勲 | 『朱の考古学』 雄山閣 1975 |
| 欠 島 澄 策
中 村 忠 晴 | 「古代の朱色塗料と辰砂について」『早稲田大学教育学部学術研究』
24号 1975 |
| 永 島 正 春 | 「縄文時代の漆工技術」『国立歴史民族博物館研究報告』6 1985 |
| 戸 高 真知子 | 「赤い供物・朱玉」『エトノス』31号 1986 |
| 本 田 光 子 | 「弥生時代の墳墓出土赤色顔料について—北部九州にみられる使用と変遷—」
『九州史学会大会発表要旨』1986 |

